

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要	編者・著者名 (共著の場合 のみ記入)	該当頁数
(著書) 1. Vasubandhu Interpretation zum <i>Pratītyasamutpāda</i> : eine kritische Bearbeitung der <i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i> (<i>Saṃskāra- und</i> <i>Vijñānavibhaṅga</i>)	単著	1993. 8 (平成5年8月)	Franz Steiner Verlag, Stuttgart 1993.8, 259S.	ドイツ、ハンブルグ大学からPh.D (哲学博士号) を取得した学位論文。 紀元400年頃のインドの仏教学匠、 Vasubandhu (世親) の著した、 <i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i> (日本語訳名 『縁起経釈』、原文サンスクリット 語、但しチベット語訳のみ現存) の、 Saṃskāra 解釈と Vijñāna の解釈部分の、 他の文献から回収できるサンスク リット語断片を付した、チベット語訳 校訂テキストと、その注解付きドイツ 語訳。		259頁
(学術論文) 1. 善慧戒の『成業論注釈』 について	単著	1985. 3 (昭和60年3月)	印度学仏教学研究 33巻2号	世親の『成業論』 (<i>Karmasiddhiprakaraṇa</i>) に対する、現存 する唯一のインド人による注釈書 (但 し、チベット語訳のみで伝わる) につ いての考察。作者、善慧戒 (<i>Sumatiśīla</i>) が、法称 (<i>Dharmakīrti</i> 600-660年) の論理学・認識論の伝統を継承する、 800年頃のナーランダー僧院の学匠で あることを論証。		150-151頁
2. The Tibetan Text of the <i>Karmasiddhiprakaraṇa</i> of Vasubandhu with reference to the <i>Abhidharmakośabhāṣya</i> and the <i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i>	単著	1985. 3 (昭和60年3月)	Introductory Remarks 3 pages, Text 57 pages, Appendix and Index 6 pages. privat issue.	Vasubandhu 作 <i>Karmasiddhiprakaraṇa</i> (『成業論』) の、チベット語訳校訂テ キスト。但し、自費出版。英文。		
3. 『俱舍論』・『成業 論』・『縁起経釈』	単著	1986. 11 (昭和61年11月)	密教文化156	滅尽定中の心の問題を、Vasubandhu がアーラヤ識概念を受容した際の、最 も重要な動機として捉え、3著作、 『俱舍論』・『成業論』・『縁起経 釈』にわたってそのテーマを追ったも の。この点でも <i>Vaiḥāsika</i> から特定の <i>Sautrāntika</i> への思想展開が認められる ことを確認。『縁起経釈』の、思想史 上の重要性を指摘、当該箇所チベッ ト語訳校訂テキストを添える。		53-82頁
4. アーラヤ識の存在論証に ついて —post Dharmakīrti—	単著	1987. 12 (昭和62年12月)	印度学仏教学研究 36巻1号	<i>Dharmakīrti</i> 以降の、単層の識相統を 前提とした認識論・論理学の系統にお いて、認識レベルでは存在価値を失っ ていくアーラヤ識であるが、 <i>Sumatiśīla</i> は、Vasubandhu のアーラヤ識存在論証 の一つを継承し、修道上、慧によって 煩惱の習気に対治する際、習気を生む 識は、慧とは別の識でなければならない として、論証を定言化した。この点 からも、アーラヤ識が、本来的に修道 と深く関わって受容された概念であっ たことを推考する論稿。		356-363頁
5. <i>Vedanā- und</i> <i>Tṛṣṇāvivhaṅga</i> in der <i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i>	単著	1991. 2 (平成3年2月)	密教文化173	Vasubandhu 作 <i>Pratītyasamutpādavyākhyā</i> (『縁起経 釈』) の、 <i>Vedanā</i> 解釈と、 <i>Tṛṣṇā</i> 解釈 部分の、チベット語訳校訂テキスト。 他のテキストから回収できるサンスク リット語断片を、対照する形で付す。 ドイツ、ハンブルグ大学留学中に、上 掲学位論文の準備の一環として作成 し、寄稿したもの。ドイツ語。		74-98頁
6. ヴァスバンドゥによる アーラヤ識概念の受容とそ の応用	単著	1993. 2 (平成5年2月)	高野山大学論叢28	上掲論文『俱舍論』・『成業論』・ 『縁起経釈』を、学位論文の成果を踏 まえて再考したもの。特に、後2著の 術語の使い分けや、引用經典の扱いの 違いに着目して、その間に、		23-59頁

7. 「不動業」について (<i>āneṣya'āniṣṣya - karma</i>) —なぜ「聖者」たちは輪廻するの—	単著	1994. 8 (平成6年8月)	『仏教における聖と俗』 (平楽寺書店)	Sautrāntikaから Yogācāra への接近の過程を認め、かつ、『縁起経釈』Vijñāna 解釈部分の内容概観を付し、その解説を通じて、ここで Vasubandhu にとって、滅尽定中の心が、なぜ他ならぬ ālayavijñāna (アーラヤ識) でなければならなかったのかを解明した論考。	123-146頁
8. アートマンなきカルマの成熟—《マートゥルンガの比喻》を巡る覚書—	単著	1994. 11 (平成6年11月)	仏教学会報18・19 高野山大学	『縁起経釈』Samskāra 解説部分前半の内容概観を付し、それを用いながら、Vaibhāṣika や Yogācāra の見解と比較しつつ、Vasubandhu の不動業について考察したもの。不動業もまた、縁起の支分としての、つまり Vasubandhu にとっては輪廻再生の原因としての、特定の Samskāra の一種であるとするところに、独自性を認めたもの。	15-25頁
9. 死の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承	単著	1995. 2 (平成7年2月)	密教文化190	Vasubandhu が諸著作の中で、業の成熟を説明する際に好んで用いる、マートゥルンガの花と実の比喻について、その意味を明らかにするとともに、用例を整理した覚書。	101-112頁
10. 'bheda' についての仏教教義解釈—肉体の壊死から心身の分離死へ—	単著	1995. 3 (平成7年3月)	印度学仏教学研究 43巻2号	『縁起経釈』の注釈対象である『縁起経』自体に立ち返って、縁起の各支分についての説明句を、他の経典や論書などの表現と比べることにより、それぞれの経典伝承を担う学派と、Vasubandhu や Yogācāra との関係を探り、Vasubandhu の置かれた足元の思想状況を解明しようとする、遼大な企図に基づいた研究の、まずは準備段階として、死の項目についての資料整理と、若干の考察。	139-143頁
11. mahāsukha と瞑想中の sukha	単著	1996. 3 (平成8年3月)	密教学研究28	引き続き、諸経典などの死の説明句と、それに対する Vasubandhu や Yogācāra の解釈について、その説明句中の bheda という語に着目した考察。これを、「身心の分離死」と解釈するところに、Vasubandhu の特色を認める。パーリ上座部系の、「身体の壊死」よりは、Yogācāra の「(アーラヤ)識が身体から抜け出す死」に近い解釈であり、「人が死ぬ時、心は身体を抜け出し、上昇する」とするブッダの言葉の一伝承にも通ずるものがある。	35-45頁
12. 誕生(再生)の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承	単著	1996. 9 (平成8年9月)	高野山大学創立百十周年記念高野山大学 論文集	インド仏教における密教と大乘仏教との思想的連続性について、「楽」(sukha) という術語の持つ仏教的解釈の展開を巡って考察。日本の真言宗において日々誦誦する『理趣経』の冒頭を飾る五句「大楽」「金剛」「不空」「真実」「三昧耶」の第一句を論じたもの。	181-196頁
13. Guṇamati's Version of the <i>Pratītya - samutpāda divi bhāṅgir deśa</i>	単著	1997 (平成9年)	<i>Tibetan Studies</i> Vol. II	縁起の支分中、死に引き続き、誕生の項目について、諸経典や論書の説明句を整理。苦諦における誕生の解釈も含めて、特に胎生生物が産まれ出る現象と捉える Vaibhāṣika の解釈に対し、本来苦諦の中の誕生が意味していたと推される「(輪廻)再生」の本義に立ち返っているところに、Vasubandhu の特色を認める。	国際チベット学会編 647-656頁
14. 密教瞑想法の開いた	単著	1998. 7	『インド密教の形成	死と誕生の説明句を整理する中で、Vasubandhu の『縁起経釈』に対して復注を書いた Guṇamati の知る『縁起経』が、Vasubandhu の注釈したそれとは別の版であったことが判明。サンスクリット語断片から解読した『縁起経釈』のある箇所につき、『縁起経』両版の一語の違いに起因して、Guṇamati の苦肉の解釈から、『縁起経釈』チベット語訳誤訳に至る過程を検証。第7回国際チベット学会(オーストラリア、1995) 発表論文。英文。	松長有慶編 269-285頁

	「心」(citta)の神秘—大乘が究極的に捨て去ったもの—		(平成10年7月)	と展開』(法蔵館)	瞑想法と、密教経典として初めて瞑想法を説く『金剛頂経』のそれとを比較し、密教が、仏を見る心までも、最終的には真実にあらずとして退ける、従来の大乘的菩薩の瞑想を、捨て去るべき難行と断じて、菩薩に対し、本来あるがままの光り輝く心たる菩薩心を自覚させ、最終的に自身が如来であることを証する神秘体験に導く方法を、脱大乘を明らかに意識して確立したことを、解明したものを。	
15.	縁起と「滅」—阿難と舍利弗の末裔たち—	単著	1999. 2 (平成11年2月)	高野山大学論叢34	死と誕生の説明句の整理を通じて明らかとなってきた、八正道に裏打ちされた縁起観と、滅尽定に集約される滅を第一義とする縁起観の存在から、Vaibhāṣika内に、古くから、いわば阿難派と舍利弗派とも言うべき修道上の対立があったことを推定し、漢訳のみ残るVaibhāṣikaの諸文献(アビダルマ文献)の読み比べによる検証に、手をつけたもの。これによりVasubandhuの足元が、少しずつ具体的に洗い出されつつある。続行予定。	1-20頁
16.	金剛喩定について	単著	2000. 1 (平成12年1月)	『密教の形成と流伝』高野山大学密教文化研究所紀要別冊2	「金剛」(vajra)に喩えられる精神集中について、空海が伝える漢訳密教文献群における用語法、特に「金剛喩三昧」と「薩般若智」の対表が術語的価値を持って用いられる脈絡に着目して、歴史的に先行するパーリ文献や『二万五千頌般若経』、さらにアビダルマ諸文献との比較・吟味を行なうことによって、この「金剛」の語義が、「無漏」なる境地における輝ける「金剛」心として、インドの初期仏教から密教に至るまで、一貫して保持・伝承されていることを論証したものを。	89-118頁
17.	ヴァスバンドゥによる「識」理解—『五蘊論』を中心として—	単著	2000. 10 (平成12年10月)	加藤博士還暦記念論集『アビダルマ仏教とインド思想』(春秋社)	ヴァスバンドゥが、アビダルマ文献に確認される「識」の二面的な価値付け、すなわち、輪廻再生機能を担う側面と日常的な認識活動を担う側面に対して、どのような解釈を行うのか、彼の諸著作、『俱舍論』『釈論』『成業論』『縁起経釈』『五蘊論』の順を追って、その思索の深まり行く道程を解明した。	167-180頁
18.	『十地経』における「大悲」(mahākaruṇā)と「唯心」(cittamātra)	単著	2000. 12 (平成12年12月)	高木博士古稀記念論集『仏教文化の諸相』(山喜房佛書林)	下記論考を、主として「大悲」の観点から、網要的にまとめ上げたもの。	高野山大学仏教学研究室編 251-267頁
19.	『華嚴経』「十地品」における「唯心」(cittamātra)について	単著	2001. 2 (平成13年2月)	高野山大学密教文化研究所紀要14	『十地経』が描く大乘菩薩は、第六地の階梯で「十二支縁起」を観察する内、「三界唯心」、すなわち、およそその一切世界に属するものは、ただ心のみである、との瞑想を行うが、それは、自分という行動主体も、苦を受ける主体である三界の衆生たちも、別々のものとしては存在せず、ただ心のみ、との真実の無我の覚知を伴って、菩薩の「大悲」を発動可能にするための、菩薩行実践の理論的側面であることを、『般舟三昧経』などとの比較分析を通して明確にした論考。	119-159頁
20.	『十地経』における「大悲」(mahākaruṇā)について	単著	2002. 5 (平成14年5月)	日本仏教学会年報67	上掲論文を補充する論考。デジタル資料を活用して『十地経』サンスクリット・テキスト全体に亘って用語例を検討し分析を行った結果、当該経典の描き出す菩薩たちにとって、その「菩薩道」における信仰対象が、何よりも先ず諸仏の持つ「大悲」にあり、「大悲」の発現と示現を目指す道程は、階梯を追って、特定の動詞と結び付いて表現されていることなどを明快に論述した。	13-26頁
21.	仏教的「一切」(sarva)と識別(viśiṣṭa) —世親の有部批判—	単著	2003. 1 (平成15年1月)	東方学105	上掲第17論文を通して、次第に明らかとなってきた、世親による「唯識」説体系化に至るまでの思索過程について、「一切は十二処である」「二つのものを条件として識別が生じる」「この五蘊の限りが人たることの全てである」、これら三つのアーガマを論拠として、	135-148頁、12頁(英文要約)

22. ヴァスバンドゥに帰せられるチベット翻訳文献群について	単著	2003.3 (平成15年3月)	論集原典 一科研、特領域研究(A)「古典学再構築」(後期: H.13-14)研究成果報告集II-	一方では『大毘婆沙』に残る瑜伽師の見解を擁護しつつ、他方で、伝統的なアビダルマ教義の正当派としての注解を担っている説一切有部の根幹の学説を批判的に乗り越える仕方、世親が『唯識二十論』を著すことを論証した。 公募研究「サンスクリット翻訳文献群としてのチベット大蔵経の研究」の代表者として、デジタル資料を活用して、チベットへの仏教前期伝播期におけるサンスクリット原典からの諸翻訳文献(特に、経典と論書)から知り得る、個々の翻訳者・グループによる翻訳技術・翻訳用語の特性を個別的に明らかにすることを旨とした、文献分析作業結果の報告とその研究遂行過程で初めて明確となった翻訳作業手順などに起因する原典逸脱などの問題点の指摘。	144-155頁, 156-167頁は 事務報告
23. 経部一初期Sautrāntika—	単著	2004.2 (平成16年2月)	高野山大学論叢39	グプタ朝期、西暦400年頃の代表的学匠ヴァスバンドゥが著した <i>Abhidarmakośa-bhāṣya</i> において、現在確認される限り、最も古い用例として現れる <i>Sautrāntika</i> と称される一派について、仏教教義解釈文献群に伝えられるアビダルマ教義との対比・吟味を通じて解明する糸口を見出そうとする論攻の序章である。平成17年度から3年間に亘る科学研究費補助金対象研究テーマに採択されている。	1-24頁
24. 『中辺分別論疏』と『縁起経釈』	単著	2004.3 (平成16年3月)	神子上教授頌壽記念論集『インド哲学佛教思想論集』(永田文晶堂)	スティラマティ作『中辺分別論疏』の中、『中辺分別論』第1章第10偈・11偈ab句に対する注釈箇所が、ヴァスバンドゥの『縁起経釈』における縁起の各支分(特に、無明・行・識)解釈に文字通り準拠していることを、写本の研究分析を踏まえて、文献学的に明らかにした。サンスクリットが完全には伝わらない『縁起経釈』の特定箇所を、部分的にはあるがインド語で回収するとともに、『中辺分別論疏』の山口益校訂梵本の批判的再校訂を行った。	701-720頁
25. Kūkai's 'One-Mind' (一心): A Characteristic Feature of his Thought in His Early Forties	単著	2004.11 (平成16年11月)	<i>Matrices and Weavings</i> 密教文化研究所紀要 Special Issue II	空海(774-835)40歳代前半—弘仁年間—の思索の深まりについて、京都高雄での灌頂儀礼執行から高野山の開創実現までの宗教体験を重ね合わせながら、「一心」の対義語が華嚴教学を背景とする「円融」なる語から唐代において「涅槃」を意味する語として仏教家が用いた「円寂」へと展開して行き、空海が涅槃の場としての高野を意識して行く過程を解明した。	254-263頁
26. 『阿毘達磨俱舍論』における 'usūtra'	単著	2006.3 (平成18年3月)	印度学仏教学研究 54巻2号	ヴァスバンドゥ作『阿毘達磨俱舍論』に他説を排斥する根拠として 'usūtra' (ストトラからの逸脱)なる用語が5箇所表れる。この場合のストトラとは、ブツダの説示内容の意味領域を明確に限定する語句を伴う、漢訳『雜阿含』に伝わる(ペーリの伝承には確認されない)伝承句であり、例えば、標舉(項目列挙)と解釈とを相備えた『縁起経』を含み、この『縁起経』を「了義」と認める立場において、ヴァスバンドゥは「経部師」や『順正理論』の「上座」に同じであることを解明した。今後の「経部」研究に資する基本的な文献研究成果である。	(155)-(159)頁
27. 『十地経』における「金鉢石」の譬喩	単著	2007.4 (平成19年4月)	『法華経と大乘経典の研究』(山喜房佛書林)	代表的初期大乘経典の一つである『十地経』は、大乘仏教徒の理想像たる菩薩の精神階梯/「地」を「一切知(一切知者たるブツダの有する智)の完全獲得に至るまでの十の階梯として説き明かす。各階梯の解説にはそれぞれ巧みな十種類の譬喩が用いられるが、初地から第十地までに亘って一貫して適用されるのが、天然の金鉢石の譬である。特に、精錬された金が、純金装身具としての土台に加工された後、二度に亘る研磨の工程を経ることが、如来の側から「加持」と「大悲」という如来固有のサンスカラを、菩薩へと向かって一方的に働きかけることの巧みな譬えとされていることを当該経サンスクリット散文作者特有の用語法を分析することによって解明した。	241-251頁

28. 輪廻の原因としての無明 —諸々のサンスカラに ついての無知—	単著	2008. 2 (平成20年2月)	高野山大学論叢 43巻	「十二支縁起」を説く代表的な4つのアーガマ を取り上げ、その内、各支分に対する残り なき解説 (<i>nirdeśa</i>) を行う唯一のアーガマ、 『縁起経』の中の「無明」解説に対する分析 を、パリー・ニカーヤ、漢訳・阿含、サンス クリット・アーガマの比較検証に基づきつつ 文献学的に行った結果、『瑜伽師地論』にお ける伝承と、ヴァスバンドゥの評に伝わった 伝承との間で、前者が諸々のサンスカラに ついての無知として理解しているのに対し、 後者の場合は諸々のダルマについての無知 として理解されている事実が判明した。	47-60頁
29. 『阿毘達磨俱舍論』にお ける 'sarvajña'	単著	2009. 3 (平成21年3月)	印度学仏教学研究 57巻2号	上掲第26論文と連続するテーマ、即ち 初期の「経部」の思想解明のための基礎 研究遂行上の文献学的分析結果の一つ。 固有の「智」を併つブッダ 'sarvajña' (一切智者)は、どのように「一切」を知る (<i>jñā</i>)のかについて、ヴァスバンドゥが 挙げる「慧師」の説 (' <i>icchānātreṇa</i> ') がアビダルマの用語であるのに対して、 彼自身の説 (' <i>śābhasātreṇa</i> ') は、「毘婆 沙師」たちが共有するアーガマである 『ピンピサーラ(王)経』から知り得る 特定の文脈でのみ伝えられる用語を 用いていることを解明した。	(218)-(226)頁
(その他)					
1. 仏教における生死観と儀 礼	単著	1997. 3 (平成9年3月)	高野山大学(講義録): 生命倫理講座講義録 生と死 その種々相	1. 平成5年(1993年)、高野山大学に おいて生命倫理研究委員会が発足し た。和歌山県立医科大学との間で、医 療と生命倫理に関する交換講義が、互 いの教授が相互に他方の大学に出講し 合うという形で開始された年度である。 その当初からの委員の一員として、 平成8年(1996年)度から本学で試 行的に始まった「生命倫理講座」と称 するリレー授業の一端を担った折の 「講義録」である。	187-214頁
2. The Formulation and Interpretation of the Āgama on Birth and Death (Summary)	単著	1997. 5 (平成9年5月)	国際東方学会議 紀要42	2. 財団法人東方学会が主催して、毎年 東京で開催されている「国際東方学 者会議」において、若手研究者が招集さ れた研究部会での研究発表を依頼され た折の口頭発表(英語)を要約した 「サマリー」である。	131-132頁
3. 法身説法と瞑想者のカ ルマ —果分可説への一指標—	単著	2002. 2 (平成14年2月)	平成13年度真言宗 教学大会・第37回 高野山安居会 講義録	3. 高野山真言宗が、夏の高野山で宗 教師を主たる対象として毎年、大師教 会本部において開催している「安居 会」に当たり、空海の「ことば」論を テーマとして講演を依頼された折の 「講義録」である。	83-164頁
4. ブッダの言葉・大師の 言葉から学ぶ「大悲」の 教え	単著	2006. 8 (平成18年8月)	高野山大学夏季生涯 学習講座テキスト	4. 高野山大学での主として一般社会 人向けの「生涯学習講座」と称する講 座が最後となった年度、松下講堂が黎 明館の名の許に新たに落慶した初め の夏、その真新しい会場で5日間(の 午前)に互り開催された大学主催夏 季講座のための「テキスト」。	口絵2頁 全85頁
6. 平安京と仏教	単著	2007. 4 (平成19年4月)	同志社大学一神教 学際研究センター、 CISMOR Voice, No. 6	5. 同志社大学一神教学際センター から依頼を受け、平安期と鎌倉期そ れぞれの時期の仏教の立場から見た 京都について、前者の平安期の「京」 に就き、空海や最澄が平城から平安 への遷都の時流に乗って宗教活動 を行った際の観点に立って見た「随 想」である。	4-6頁
(英文口頭発表)					
1. Guṇamati's Version of the <i>Pratītyasamutpāda -</i> <i>ādivibhaṅganirdeśa</i>		1995. 6 (平成7年6月)	第7回国際チベット 学会 オーストリア (グラーツ市)	1. 上掲の「学術論文」No. 13として公 表した折の口頭発表。	

2. The Formulation and Interpretation of the <i>āgama</i> on Birth and Death	1997. 7 (平成9年7月)	第35回国際アジア・北アフリカ研究会議 (ICANAS) ハンガリー(ブダペスト市)	2. 本国際会議の Proceedings は公刊されていない。上掲(その他) No. 2の「サマリー」において、当該研究結果の肝要部分を公表した。
3. Kūkai's 'One-Mind': A Characteristic feature of his Thought in His Early Forties	2002. 9 (平成14年9月)	国際シンポジウム、 <i>Matrices and Weavings: Expressions of Shingon Buddhism in Japanese Culture and Society</i> アメリカ (ホノルル市)	3. 上掲の「学術論文」No.25として公表した折の口頭発表。
4. <i>adhiṣṭhāna</i> and <i>mahākaruṇā</i> in the <i>Daśabhūmikasūtra</i>	2006. 9 (平成18年9月)	国際密教学術大会 (ICEBS) 高野山大学	4. Proceedings of the International Conference on Esoteric Buddhist Studies, Koyasan University, 5 Sept.-8 Sept.2006, <i>Esoteric Buddhist Studies: Identity in Diversity</i> , pp.420-422に、パネル「『華嚴経』と「加持」概念」におけるパート発表要旨として所載。上掲の「学術論文」Nos.18-20の概要部分の英文発表である。

学会等および社会における主な活動		室寺
平成19・20・21年度 (2007-2009年)	東方学会 日本印度学仏教学会 日本仏教学会 日本西藏学会 日本密教学会 密教研究会 密教図像学会 インド思想学会 パーリ学文化学会 宗教倫理学会 印度学宗教学会	
大学行政への係わり (所属委員会)		
平成18年度 (2006年)	仏教学科主任 自己点検・評価検討委員会 入学試験委員会 教務委員会 教職課程担当者会議 科目等履修生選考会議 F D問題検討会議 大学院委員会 大学院改革委員会 密教文化研究所兼任研究所員 創立120周年記念事業委員	
平成19年度 (2007年)	学生部長 仏教学科主任 入学試験委員会教務委員会 自己点検・評価運営委員会 密教文化研究所兼任研究所員 教職課程担当者会議 科目等履修生選考会議 学生部協議会 GP課程本部	
平成20年度 (2008年)	学生部長 スピリチュアルケア学科主任 平成22年度学科編成協議会 教務委員会 自己点検・評価運営委員会 密教文化研究所兼任研究所員 学生部協議会 人権教育研究会 質の高い大学教育推進プログラム本部	
平成21年度 (2009年)	学生部長 スピリチュアルケア学科主任 文学部改組に関わる全学協議会 教務委員会 自己点検・評価運営委員会 密教文化研究所兼任研究所員 学生部協議会 人権教育研究会 密教文化研究所協議会	
平成22年度 (2010年)	副学長 (学生サポート等担当) スピリチュアルケア学科主任 大学院委員会 自己点検・評価運営委員会 人権教育研究会 密教文化研究所協議会 密教文化研究所兼任研究所員 薬物等乱用防止対策委員会	

所属	文学部	職名	教授	氏名	室寺義仁	大学院の授業担当の有無 (有)
教育活動						
教育上の主な業績		年月日		概要		
1. 教育内容・方法の工夫 (授業評価等を含む)		平成21年度 (2009年)		講読演習では、各学期末に、各自の卒論作成に向けたレポートの提出を求め、添削指導を行った。学部の各講義では、授業テーマに合致した最新の研究書から代表的論考を複写して配布し、その論述典拠となる原典資料(サンスクリット、パーリ、チベット、漢訳)を和訳を添えた形で用意し、テーマの内容理解に資した。新入生向けの教養的授業の場合、基本テキスト(市販の概説書)を指定した上で、原典資料や美術作品・考古資料などを補助教材として作成し、どのような学術的手法を経ることで、客観性に基づきながら合理的な諸論拠をもって、観察・吟味を繰り返しつつ、思索を深めて行くことができるのか、個々の事例に則しながら、テキストの記述内容を根拠付ける原資料を具体的に解説することに努めた。大学院の授業では、授業に対する希望・要望や、レポートの提出に当たって、随時e-mailを活用した。ただし、授業時間外における学生との個別対応時間が増加することとなった。		
2. 作成した教科書、 教材、参考書		平成21年度 (2009年)		特に、なし。		
3. 教育方法・教育実践 に関する発表、講演等		平成21年度 (2009年)		特に、なし。		
4. その他教育活動上 特記すべき事項		2006年4月から大学院間の教育研究活動を開始した「京都・宗教系大学院連合」(Kyoto Graduate Union of Religions Studies)、略称 K-GURS(設立は2005年7月31日)の事務局員を担当した(06-08年度会計担当。なお、事務局は同志社大学神学部内)関係で、大学院博士後期課程の院生研究発表を学術大会の基本とする「宗教倫理学会」の事務局長を2008年度(08年10月)から担当(現在に至る)。				